

【クリスチャン・ポルトンスキーにささやく】

クリスチャンにささやく——インファンスの可能な／不可能な儀礼

クリスチャン Christian、きみが誰だか、ぼくは識らない。きみのファミリー・ネームも識らない。いや、ファミリー・ネームなどぼつさり忘れてしまおう。だって、ファミリー・ネームからさまざまな〈生の物語〉がはじまるのだから。クリスチャン、それは、ファミリーのなかに埋め込まれたままで、まだ世界——そう、このあまりにも悲劇的で、かつ途方もなく喜劇的な世界——のなかで、〈生〉をはじめていない、イノセントなインファンス（コードモ） infants の名。ごめん、infans は語源的には、〈言葉ナキモノ〉なのに、きみはきつとあまりに饒舌なのだ、でもきみの饒舌は、まるで秘密の空洞のように、沈黙を抱え込んでいないわけではないのではないかい？ いや、「クリスチャン」とぼくがささやきかけているのは、まさしくそ

の空洞としてあるきみへ、なのだけどね。

だって、きみは、〈空洞〉から生まれた存在だもの。ちがうかしら。きみが生まれたとき、きみに父親はいなかった。ポリオにかかって歩けない母親だけがいた。でも、それは、リアルという虚構。母親の家の床下には、誰も知らない〈空洞〉があつて、そこにまるで〈亡霊〉のように、息をひそめて父親が生きていた。⁽¹⁾「へい存在」と「動けない存在」のあいだの奇妙な婚姻、そこからきみが出現した。それだけで、クリスチャン、ぼくは、きみの名が——秘密の懐胎だ！——まさに正當に Christ- という印をもっているのだ、と言いたくなってしまう。もちろん、人々は、自分という存在が懐胎された状況を覚えているわけではないと言うだろうが、きみだけは、不可能性と可能性のあいだにひとつの〈存在の運命〉が決定されることもたしかにあると、なんとか首肯してくれるのではないだろうか。だって、インファンسにとつては、時間は線的に順序づけられていないのだから。

インファンスにとつての最大の課題のひとつは、線的な時間を構成すること。それによつてはじめて自分という統合の経験が可能になる。そのためにこそ物語がある。物語の中身はなんでもいい。自己同一化が可能な〈人物〉があつて、それが動いていく。はじめとおわりがはっきりした線的な構^{コンポジション}成^ガありさえすればいい。インファンスは、そこから学んで、自分が生き

ている時間を線的に秩序づけることができるようになる。そこから記憶が可能になり、「わたし」という経験が可能になる。

ところが、きみの事例は、ちょっとちがっていたかもしれない。物語のフィギュアは、きみ自身だった。しかも、物語のはじめには〈空洞〉があった。床下に隠された空間があったのだ。かつ、そこには、〈影〉のように、誰かが、——のちにそれが〈ユダヤ人〉という「禁じられた存在」としてのきみの父親だということになるのだが——棲んでいた。まちがいなくきみ自身の物語であるのに、はじめは、きみにはまったく記憶がない〈空洞〉によって占拠されている。きみの物語、きみの時間なのに、きみにはどうやってそれがはじまったのか、わからない。物語は線的に統一されず、時間は〈空洞〉のなかに消えて行く。

だから——まちがっていたら、ごめん——きみは、時間というものを信じることができない。時間が何であるのか、——ほんとうは誰も知らないのだけど、その暗黙の了解の上にわれわれの全現実が打ち立てられているのだ——きみにはわからない。だから、きみは、安易に線的に時間を了解してしまっているわれわれからすると、まるで「時間というものがない」かのよう
に振舞うことができる。物語的な文脈がいつさいないところで、ことさらに強い意味のないことを、ずっと反復し続けることができる。たとえば土で球をつくるというようなことを、何か

月もかけて三千回も繰り返すことができる。それは、「完全な球」をもとめてだったということになっていくけれど、どうかな？ ぼくには、きみがそうやって、時間を構成しようとしていたと思える。土のボール一個、それが「時間」の単位。その反復。だが、そうなる時、きみのこの「時計」は、その度ごとに消えてしまうのではなくて、——作るそばから壊してしまうのなら別なのだが——きみの部屋という空間のなかに、並べられることになる。「時間」の構成が、そのまま空間の構成となる。物語的な線的な時間構成が、反復によって生み出される多元的な空間構成となる。「時間」の空間的展開——そうして「時間」を構成することを学んだきみは、たとえばその展開に、「クリスチャン・ボルタンスキー」と署名することができるようになる。

でも、それは、まるで「時間の墓地」。奇妙な言い方だということにはわかっているが、——数百年の「風鈴」（アニミタス＝祭壇）でも同じことだが——三千個の土のボールが並んだ空間はそれではかありえない。問題は、安易に時間を了解してしまっているわれわれは、その空間を一瞬のうちに「墓地」として了解してしまって、なかなかそれが、「時間」へのアプローチだということを理解できないということ。だが、このようなことを言われると、われわれは、すぐに反作用として、そこに埋められている個々の「生の物語」に耳を傾けなくてははいけない

というモラルの方向に思考を拘束しようとする。決定的に失われてしまった生き生きとした時間を甦らせるのかなんとか。ちがうよね？ 最初に個々の「生」の時間があって、それが失われて、だからいま、それを、「記憶」として甦らせるという、「時間」を前提にした「物語」ではないよね？ むしろ、「時間」というものを、反復による空間的な隔たりの展開を通して理解し、信じようとする不可能⇨可能な試みではないだろうか、とぼくは思う。

一個の土のボール、それは物語以前だ。一枚の顔写真、それは物語以前だ。だが、それらが、ひとつの空間に十分に多数集められ、並べられ、構成されると、なにか「空間化された時間」のようなもの、「空間化された物語」のようなもの、が立ち昇る。あえて言えば、それは、儀礼的な時間⇨空間ではないだろうか。儀礼とは、まさに、共同体にとつての神話的「時間」を、反復的に生き直すことで、自分のうちに統合する仕掛けであるからだ。だが、クリスチャン、きみの「儀礼」は、共同体によって了解される物語以前であるがゆえに、また、同時に、インファンスの遊びの時間⇨空間でもあるのではないか。つまり、「遊び」とは自分のための「儀礼」ということだよ。儀礼⇨遊びを通して、きみは、「時間」を問い、「時間」を「空間」へと開く。

そして、この「空間」を、今度は、(不特定多数の)人々へと「開く」。それこそが、アート。

つまり、ここに至っては、アーティストとしてのクリスチャン・ボルタンスキーさんと呼ぶしかないのだが、きみは、きみのための「儀礼Ⅱ遊び」の空間に、人々を招き入れる。それは、きみだけの「儀礼Ⅱ遊び」であるにもかかわらず、しかしまた、あらゆる現実の共同体の闘を越えた、もっとも広い意味での「人間」（きみは「マンシュリツヒ Menschlich」と言うかもしれない）のための、かれも彼女も誰もがそれであるところの「人間」のための「儀礼Ⅱ遊び」でもある、そうでなければならぬ、ときみは宣言する。

この「儀礼Ⅱ遊び」の場に入ると、誰もが居心地が悪い。まるで自分と関係のない外国の村の墓地に、理由なく、いるときのように居心地が悪い。誰もが、ここには、自分の「時間」がないと感じる。突然、時間の流れのなかに〈空洞〉が開いて、そこに落ち込んでしまった感覚。ここでは時間が停まってしまっている。にもかかわらず、ほら、そこには、わたしの知らない誰かが、わたしを見詰めている。わたしの知らない誰かが、耳元でなにかをささやいていたりする。かならずしも亡霊というわけではない。だって、これは、降霊術の儀礼ではないのだから。ただ、この空間の全体が、眼差しをもち、声をもち、そうしてわたしに、「あなたもわたしと同じように人間であるのよ」と告げている。すなわち、生きられた時間を分有することができるのに、（そして時間を分有することこそ、人間の共同性の根源的次元なのに）、にもか